

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

翻訳についての断章

山岡洋一

- 翻訳学習者に与う

「翻訳学習者」というのは翻訳についての世間の誤解を集約したような不思議な言葉だ。翻訳を学習しようとするからうまくいかない。何よりも、「翻訳学習者」という看板を下ろした方がいいといえるほどである。

ひとさまの誤訳(第十回)

柴田耕太郎

- 『翻訳力練成テキストブック』(柴田耕太郎著、日外アソシエーツ刊)

他人の誤訳・悪訳はすぐ目につくものだが、自分のはどうなのだろう。そう思って、昨年2月刊の自著を丁寧に見直してみた。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

翻訳学習者に与う

翻訳という仕事を長年やっていると、翻訳家になりたいという人から助言を求められることが多くなる。そういうときに受ける質問と、それについて考える点とをいくつかまとめておこう。

得意だし好きな英語を活かせる仕事をしたい.....

これは翻訳学習者の合言葉のようなものだが、そういう話を聞くたびに、正直なところ気の毒になる。

まず、知り合いの翻訳者の間で、得意な英語を活かそうと翻訳をはじめたという人は少数派だ。なぜ少数派なのか、理由ははっきりしている。英語の文章が読めるのは当たり前、翻訳者にとって当たり前というだけでなく、まともな社会人にとって当たり前なのだ。自慢になるようなことではない。それに翻訳には、さまざまな知識を吸収する力、内容を理解する力、理解した内容を日本語で表現する力など、多様な力が必要だ。翻訳は総合力の勝負なのだ。

総合力が必要だなどと綺麗ごとをいっても通じないのが普通だから、どぎつい言い方をするしかない。英語が得意だというのはたいてい、中学か高校のころに「英語ができるね」と褒められたからだ。なぜ、英語ができると褒められたのか。褒める側からみて、他に取り柄がなかったからだ。「英語ができるね」はお世辞。本音は「英語は少しできるね、他は駄目だけど」だ。褒めるはけなす、けなすは褒めるなのだ。総合力が高いと思えば、誰も「英語ができるね」とはいわない。こんな簡単な事実に気づかないから、英語が得意だなどと思いつく。気の毒だとしかいいようがない。

証拠はあるのかという人もいるだろうから、簡単な事実をあげておこう。英語が得意だし好きだから翻訳者になりたいという人には少なくとも 1000 人以上会ってきたが、そのなかに、翻訳に必要な水準まで英語の文章が読める人はほとんどいなかった。構文解析すらできない。だから、英文和訳の基準で考えてすら、誤訳のない訳文が書けない。この程度でなぜ、英語が得意だと考えているのか、不思議に思うのが普通だ。

英語が得意だというのなら、せめて構文解析がしっかりとできるようにしてほしいと思う。構文解析というと、そういうのは古い、英語の感覚を身につければ

解析などしなくても英文を自然に理解できるようになるという人が少なくない。感覚が大切なのは確かだが、そう主張する人はたとえば、A and B of C というじつに簡単な句の解釈を間違えることが多い。なぜ間違えるかということ、感覚だけに頼っているからだ。感覚だけに頼っていると、日本語の感覚と英語の感覚の区別がつかない。英語の感覚では(A and B) of C が自然なのに、日本語の感覚で自然に感じる A and (B of C)だと思いつく(ただし、それが自然だというだけで、例外もたくさんある)。日本語の感覚と英語の感覚の違いを意識化し、論理的に把握するのが、構文解析である。構文解析をおろそかにしては、英文は読めない。英文が読めなければ、翻訳はできない。

構文解析がしっかりできるのであれば、論理的な思考ができるのだから「英語ができるね」などという失礼なことは誰にもいわれなくなるだろう。

翻訳と通訳のどちらを選ぶのがいいか.....

こう真顔で聞かれると、返事に窮してしまう。翻訳と通訳は似ているというのが世間の常識だが、翻訳者の立場からはそうは思えない。アナウンサーと新聞記者ぐらいの違いがあると思える。アナウンサーと新聞記者はどこが違うか。アナウンサーが結婚すると週刊

進化大全

ダーウィン思想: 史上最大の科学革命 Evolution
The Triumph of an Idea
カール・ジンマー [著] 渡辺政隆 [訳]

B5判変型
オールカラー500ページ
写真・図版類150点

進化理論の
歴史から
最先端までを
網羅した一冊。



●定価 6,000円(税込み) ISBN 4-334-96173-8

光文社 〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6
<http://www.kobunsha.com>

誌や新聞で記事になるが、記者が結婚しても記事にならない、というと響きを買うだろうか。だがこれはある意味で正しい答えだ。アナウンサーは華やかで、記者は地味だ。そして通訳はある意味で華やかだが、翻訳は徹頭徹尾地味だ。それだけではない。アナウンサーはしゃべるのが仕事、記者は書くのが仕事だ。そして通訳はしゃべる仕事、翻訳は書く仕事である。

どちらも外国語の仕事ではないかと思われるかもしれないが、翻訳者にとって外国語は手段のひとつでしかない。手段として外国語が必要不可欠な仕事はいくらでもある。会社勤めに英語が不要かどうか、日産の社員に聞いてみるといい。サッカーにスペイン語が不要かどうか、大久保選手に聞いてみるといい。

翻訳では外国語は手段のうちの一つでしかない。翻訳は何よりも母語で書く仕事である。読者に喜んで読んでもらえる文章を書くのが仕事だ。だから何よりも、プロとして通用する日本語が書けなければいけない。外国語力と少なくとも変わらないくらい重要なのが母語での文章力である。

翻訳は創造的な仕事だといわれているが.....

そう主張する人がいるのは確かだ。そういう主張には2つの背景があるように思う。

第1に、どういうわけか、翻訳はいま憧れの職業になっているようで、大学で翻訳を教えてほしいと学生に求められることが多いという。そのときに、たとえば小説を書くことなどとてもできないが、小説の翻訳ならできると考えている学生が多いようで、翻訳はそんな甘いもんじゃないと教諭すために、翻訳は創造的な仕事だと主張する先生がいる。

第2に、いまの世の中では、これもどういうわけか、創造的な仕事は価値が高いとされている。翻訳は創造性の対極にある仕事なので、こういう世の中では馬鹿にされやすい。そこで、翻訳だって創造的な仕事なのだと言おうとする人がでてくる。いってれば、相撲人気の回復のために、相撲取りにもイケメンがいると主張するようなものだ。

どちらの主張も信じるには足りないように思う。翻訳は創造や独創と少なくとも変わらないほど重要な役割を担っている。その点を考えていく方が翻訳という仕事の性格を理解しやすくなる。

「知的財産権」という言葉を聞くか目にしたことがあ

るだろう。「知的所有権」と呼ばれていたものが最近、そう呼ばれるようになった。何となく古臭い言葉だと感じたとすれば、言語感覚が鋭いのではないだろうか。

中世には重要な知識は秘密にされ、独占されるのが常識だった。門外不出、一子相伝、免許皆伝などの言葉がそれを象徴している。近代になると、知識の独占が社会の進歩を妨げることが認識されるようになり、知識の公開が原則になった。だが、知識の独占は支配のための手段だったし、近代になると金儲けのための手段になったから、知識をもつ人は簡単にはそれを公開しようとしなない。そこで作られたのが特許権、著作権などのいわゆる知的所有権だ。これは知識を公開すればその代償として、一定期間に限って独占権を与える仕組みである。だから、知的所有権とは基本的に、知識の公開のための手段であった。

いま、この知的所有権を逆に、知識の独占のための手段にしようとする動きがある。これは要するに中世に戻そうとする動きであり、そう主張する人たちは知識の公開の対価という意味をもつ「知的所有権」という言葉を嫌い、「知的財産権」という言葉を使うよう提唱している。

このときにカギになるのが、創造性を至高のものとする考え方だ。

最近話題になった青色発光ダイオードを例に考えてみよう。世紀の発明だから、発明者に何百億円も支払うのが当然だと主張した人がいた。苦笑するしかない。青色発光ダイオードが貴重な発明であることはいうまでもない。だがその前に発光ダイオードがあり、その前にダイオードがあり、その前にダイオードの原型になった真空管があり、そのはるか前にももちろん電気がある。これらの知識が一子相伝にされず、公開されて継承されてきたからこそ、青色発光ダイオードがある。それだけではない。青色発光ダイオードの発明には多数の研究者が取り組んできた。この方法で失敗し、あの方法でも失敗したことが公表されてきたからこそ、成功する人がでてきた。失敗の蓄積があったからこそ成功したのだ。その点を考えていくと、創造性といわれているものがじつは個人技ではなく、たくさんの人たちの努力に支えられていることが分かるはずだ。たくさんの人たちが知識を生み出し、それが公開され、継承されてきたからこそ、個人の努力が実るのである。

相撲取りはファッション・モデル並みのスタイルと顔の良さで勝負したりはしない。翻訳者は創造性で勝

負したりはしない。翻訳者は、たとえば外国の優れた知識を母語で学べるようにし、それを学んだ人が創造性を発揮できるようにする役割を担う。あるいは創造性とは違った部分で社会に寄与できるようにする役割を担う。また、外国の独創的な娯楽を母語で楽しめるようにする。創造性や独創性とは土俵が違うところで社会に貢献するのが、翻訳者だ。翻訳には創造性がないといわれれば、それがどうしたといえればいい。

独学でも翻訳は学べるのか.....

これも、真顔で聞かれると返事に窮してしまう質問だ。なぜ答えに窮するかというと、この質問の背景にはいくつかの前提があるからだ。まず、翻訳は学べるものだという前提がある。そして、翻訳学校で学べるという前提がある。翻訳者になりたければ、翻訳学校に通って基礎から一歩ずつ学んでいくべきだとは思いますが、そうはできない事情があるので、独学でも学べるかを質問したいのですというわけだ。

簡単な事実をみていけば、この前提がどこかおかしいことに気づくはずだ。世の中には大量に翻訳学校があって、ずいぶんたくさんの方が翻訳を学習している。大量の学習者を集める通信教育もある。ところが、たいていの学習者が目標にしている出版翻訳は、せいぜい数百人が仕事をしているにすぎないほど、そして多くても数十人が生活費を稼げるにすぎないほど規模が小さい。この事実をみただけで、翻訳学校で学べば出版翻訳者になれるとは考えにくいことが分かる。もうひとつ、現に活躍している翻訳者のなかに、翻訳学校で学んだという人が意外なほど少ない事実も指摘しておこう。翻訳学校にはじめて行ったのは講師としてという人も多い。

違った例をあげると、同時通訳者は知っているかぎり全員、通訳学校か大学で通訳の訓練を受けている。通訳学校に通えば同時通訳者になれるわけではなく、せいぜい何%の人がなれるにすぎないようだが、それでも独学で同時通訳者になったという人はまずいないはずである。こういう事実があるからおそらく、独学では通訳は学べないというのが正解である。

この点も、翻訳と通訳の違いを示すものなのだろう。通訳は訓練を受けなければならない。翻訳は違う。翻訳は学校に通わなくてもできる人はできるし、通ったからできるようになる仕事ではないようなのだ。だから、翻訳は才能だという意見があるのも不思議ではない。翻訳は学んでできるようになるものではない、できる人ははじめからできるし、できない人はいくら学

んでもできるようにならないというのだ。こう断言してしまうのが、現役の翻訳者にとっていちばん楽であるのは確かだ。教える必要はなくなるし、競争相手があらわれるのを封じることでもできる。

それはともかく、少なくとも、翻訳は学べるものだという見方を当然の前提にするわけにいかないことだけは確かだと思う。翻訳は週に1回学校に通って授業を聞けばできるようになるほど簡単ではない。翻訳者養成のマニュアルなど、おそらくどこにもない。少なくともほんとうに役立つマニュアルはない。決まったカリキュラムをこなせばできるようになるほど、ノウハウが固まってははいない。

ではどうすればいいのか。それが分かれば苦労はない。だが、翻訳を「学習」しようとしても無理であるのは確かだ。翻訳を「学習」するというとき、翻訳の世界にも小学校から中学、高校、大学のような決まった階段があると考えている。入門から基礎学習、応用学習を経て、下訳者になり、翻訳者のひよこになり、一人前になり、最後に一流の翻訳家になるという構造があると想定している。この階段を一歩ずつ上がっていけばいいのだと想定している。階段の一段ごとに懇切丁寧に教えてくれる教師がいるはずだと想定している。だが、翻訳の世界はそんなに組織だっていない。

階段などどこにもない。決まった道筋はない。だから、階段を一歩ずつ上がって翻訳者になること、あるいは自分の名前で翻訳書をだすことを目標にしていては駄目だ。そんなに低い目標では追求する意味がない。はじめから一番上のさらに上を狙うほどの気合がなければいけない。いま世の中にある翻訳をはるかに超えるほど質の高い翻訳をしてみせるといほどの覇気がなければいけない。既知のものを学習するのではなく、未知のものを研究しようという意欲がなければいけない。新人はそうでなければいけない。

そう考えていくと、「翻訳学習者」というのは不思議な言葉だと思えてくる。翻訳についての世間の誤解を集約した言葉なのではないかと思えてくるのだ。翻訳を学習しようとするからうまくいかない。何よりも、「翻訳学習者」という看板を下ろした方がいいといえるほどである。

『翻訳力練成テキストブック』(柴田耕太郎著、日外アソシエーツ刊)

他人の誤訳・悪訳はすぐ目につくものだが、自分のはどうなのだろう。そう思って、昨年2月刊の自著を丁寧に見直してみた。あるわあるわ、200箇所ほど朱を入れたいところが出てきた。そのうち、元のままでは読者が誤った理解をしてしまう箇所を取り上げてコメントする。(原文、私の解説、今回のコメントの順。下線部は問題箇所)

p10

*帰属を巡り、かってドイツとフランスの間でもめたアルザス・ローヌ地方のテレビ特集番組。ドイツ側からの取材のナレーション「時の皇帝、ギョーム 世は...」におやっと思いました。「ギョーム」は「ウィリアム」(英)の仏読み、ドイツ皇帝であれば「ウィルヘルム」とすべきところです。

コメント:

William, Wilhelm, Guillaume、いづれも元は同じ名前。スイス独立の伝説的英雄 William Tell なら、英語読みで「ウィリアム・テル」、ドイツ語読みで「ヴィルヘルム・テル」。ここも「ヴィルヘルム」とすべきところ(独文学の教授に確認済み)。

じつは校正の時、念のため電子広辞苑を引いたら「カイザー」の項に「...。日本では特にドイツ皇帝 ウィルヘルム二世をカイゼルと呼んだことがある」とあり、不承不承修正したのだった。電子広辞苑では Wilhelm Tell が「ウィルヘルム・テル」、ゲーテの長編小説 Wilhelm Meister が「ウィルヘルム-マイスター」となっているが、何か意図あつての読み方なのだろうか?

P39

He will not be noticed until he becomes noticeable, and he will not become noticeable until(13) he does something to prove (that he has a value in society).

(13)A until B 後ろから「BするまでAしない」前から「Aしてこそ(はじめて)Bする」 訳しやすいほうをとる。

コメント:

主節の付帯状況をあらわす without の例と混同したのか?

not A until B は、否定的に「BするまでAしない」

肯定的に「Bしてこそ(はじめて)Aする」。

p75

2. 一般人称

we, you, they, one などは漠然とした対象として示されることがある。「他人事」の程度は左から右へ増してゆく。ニュアンスの問題ともいえるが、頭の隅で覚えておきたい。

コメント:

書き落としてならないことが、抜けている。

we では they が意識され、they では we が意識される。one は文語的、you を使うのが一般的。

P77

His object is merely to understand, and pass on to his readers, as much truth as he can comprehend.

<原文に即した訳>

作家の目的は自分が会得できるだけの真実を理解し、読者に伝えることだけである。

コメント:

understand は自動詞。comprehend は understand の言い換え。

understand を他動詞、その目的語を as much as 以下とは、とり難い。

理由() 目的語のなかの comprehend と同義語反復がうるさい

理由() understand と pass on to の並列が不自然

作家の目的はただただ理解し、会得できるだけの真実を読者に伝えることである。

P140

Q :The moon was coming up out of a clear starry sky over the houses opposite the station entrance.で対象物間の位置関係がわかりません。

A : (略)

現在進行形は(1)現に進行・継続中の動作 (2)動作の反復 (3)近接未来、を示す。この coming up は(1)だが「出ようとしていた(...しつつある)」ではなくて、「出ていた」。I am going to school.(学校に向かう途上)

の用い方ではなく、「既に出ていて、その状態が継続している(...しているところ)」

例：He is teaching English to the students.

コメント：

come は動詞であり、動詞の進行形は一時的な状態を示すから、例の He is teaching と同じ扱いにしたくなる。だが、come とか arrive は、その動作の完了前後では様相が変わってしまうのを考えると、これは変化の過程ととるのが順当だろう（心理的にはAのような気分があってもよいが）。極端な例で die。He is dying. が死んでいる状態が一時的に起こっているのではなく、「死にそう」(死に近づいている)であるのがわかっていくというもの。

この come は(1)「来る」過程で、「来てしまう」(完了)状態に近づく状態の変化を示す。文法的には接近、心理的にはほぼ実現、という感じで理解したい。

P194

Q：I am going to America. と I will go to America. は違うのでしょうか。

A：(略)

現在進行形：予定していること。

例：I'm having guests next Sunday. (次の日曜にはお客を呼ぶことになっている)

be going to：(はっきり)決まっていること。

例：I'm going to visit Kyoto next Monday. (今度の月曜、京都に行きます)

「一人称で未来を示す確実さの程度」

現在形 be going to be going will 'll

コメント：

これ明らかに間違い、汗顔の至り。

と を入れ替えて、

be going to：(頭の中で) 予定していること

現在進行形：(はっきり) 決まっていること

現在形 be going be going to will 'll

p209

To be happy(1), a man must feel, firstly, free and, secondly, important.

(1)「幸せであるために」だが、be は状態を示す動詞なので、日本語の語調からすれば「幸せになるために」としてもよい

* ...になれば、当然...であるわけだから

コメント：

苦しい説明だ。私も執筆時点ではこの程度の認識でいたのだが、「状態動詞と動詞の間に過程動詞という要素があり、多くの動詞は「状態と過程」(例：be「ある」「なる」)「動的と過程」(例：make「する」「なる」)のふたつの面を持つ」という考え方を持ち込むとわかりやすい。

I am a boy. (私は少年です。私 = 少年「... (で) ある」状態)

I'll be twenty tomorrow. (私は明日二十歳になります。)

私が(そういう状態に)「なる」過程)

そこで解説は、

この be は過程動詞として使われているので「幸せになるためには」と堂々と訳すのがよい。

p215

What is it(1) in the English mind and character, or in the English way of life, that has proved so favourable to poetry?

(1)it は that 以下を示す

コメント：

これは強調構文。it, is, that をはずし、what を something に置き換えて、語順を適当に並べ変えてみればよくわかる。

Something has proved so favourable to poetry in the English mind and character, or in the English way of life.

長谷川 宏

いまこそ読みたい 哲学の名著

自分を変える思索のたのしみ

アウグスティヌス シェイクスピア プラトン
アラン ルソー 孔子 マックス・ヴェーバー
パスカル J・S・ミル フォイエルバッハ
ボードレーン デカルト ドストエフスキー
ウイゲンシュタイン メルロ・ポンティ

晴耕雨読にふさわしい古典たちから
「哲学」のおもしろさが見えてくる。

●1,785円(税込み) 4-334-97459-7

光文社 〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6
<http://www.kobunsha.com>

p307

In the act of making the core of the metropolis accessible, the planners of congestion have been making(24) it uninhabitable.

(24)make A (it) B (uninhabitable)「A を B にしてきた」
(現在完了進行形：過去から現在まで引き続いてきたに力点)

コメント：

現在完了進行形は「行為」に力点があるのであって、必ずしも現時点でその行為が継続しているかどうかは分からない。

へーっと、思う方もおられるでしょう。

『日本人の英文法』(研究社、T・D・ミントン)に次の記述がありません(p63)。

- ・ How long have you been working on that essay?
その論文、どのくらいの時間やっている[た]の?
(略)つまり、現在完了進行形は、状況次第で、その行為が今も続いている
その行為が(ごく近い過去の時点で)止まった
のどちらを表すこともできるのです。

p322

And all over the world the same sort of urban dispersal will(16) be taking place, at an accelerating rate.

(16)現在の推量「...だろうと思われる」

コメント：

この解説は正しい。だが問題は、どうして未来進行形でなく、現在の推量ととるべきなのかということだ。じつは私は執筆の時点で、前後が現在の事実を淡々と述べている文脈から、この will は(1)命令、でも(2)意志未来、でも(3)単純未来、でも(4)現在の習慣・慣習、でもなく(5)現在の推測、ととったのだが、どこか気持ち悪かった。なぜ、take が進行形になっているのだろうか...

あとで理解したのだが、これは状態動詞と動的動詞の問題に帰着する。ここ、will take としたらどうだろう。どうしたって未来(「行われるはずだ」)に読んでしまうだろう。そこで、現在の推量を表しているのを示すために、動的動詞を進行形にするのである。これが状態動詞であれば、そのまま現在の推測をあらわせる。例：He will probably be upstairs.(たぶん上にいるよ)

未来進行形(客観的・丁寧・確実などを含意)の形に見えるが、そうではないことに注意したい。

本書のほかの二、三の箇所でも will+動的動詞を

「現在の推測」ともとれるとコメントしているが、よくない。その場合は、基本的に「単純未来」である。

p373

And whoever does not exert himself until he has a large power of carrying out his good intentions, may be sure that he will not make the most of the opportunity when it comes.
*be sure と思っているのは whoever(=anyone who)、may と許可・認容しているのは文の著者。

コメント：

恥ずかしい。とんでもない間違いだ。

同文を使った本文第二部課題 2 の説明はきちんとできているから、読者に二重の混乱を起こさせてしまう。

sure(「全く疑念がない」)と判断しているのはこの文の筆者(may は筆者の推量)。

P410

The genuinely popular culture of England is something {that goes on beneath the surface./ unofficially} and (more or less frowned on by the authorities)}.

コメント：

カッコの括り方がまずい。これでは、something が「眉をしかめる」ことになってしまう。

unofficially は and の仲立ちで more or less frowned on by the authorities と並列し、goes on に掛かる。

The genuinely popular culture of England is something {that goes on beneath the surface./ (unofficially) and (more or less frowned on by the authorities)}.

P555

If by democratic methods people get a government strong(6) enough to protect them from fear and starvation, their democracy succeeds:

(6)「政府を強いものにする」get + O + C で「(人・物)をある状態にする」

例：He got his hands dirty. (自分の手を汚した)

*「得る」ととるのは、原文の単語の結びつき方、また文の説得性(people の主体性)から、×とはいわないがグレー

コメント：

「得る」なら get a strong government となるだろう。形容詞が名詞の後ろから掛かるのは一時的状態を示すようで、不自然。×と言ってよいだろう

p567

The primitive root of the pleasure of parenthood is two-fold. On the one hand there is the feeling of part of one's own body externalized, prolonging(12) its life beyond the death of the rest of one's body, and possibly in its turn externalizing part of itself in the same fashion, and so securing the immortality of the germ-plasm.

(12)「(時間・期間などを延長する)ここは現在分詞による分詞構文。前節の付帯状況をあらわす

コメント:

prolonging 以下は、形容詞的に「prolong する one's own body」、動詞的に「one's own body が prolong する」とふたつの要素に分解できるので現在分詞による形容詞。

p585

In the political life of democracies we see men enthusiastically supported and really admired with sincerity

so long as they remain in opposition, and their friends indulge the most favourable anticipations about what they would(16) do if they come to power, but when they accept office they soon lose many of these friends, who are quite sure to be disappointed with the small degree in which their excessive hopes have been realized.

(16)現在時の推量 (if 節の動詞が現在なので仮定法ではない)

コメント:

if 節が単なる仮定、帰結節 will の意味の弱化(丁寧、遠慮、控え目)で would となった。

全てわたしの実力の無さです。副題の「一点の曇りもなく英文を読み解く！」などとは、おこがましい限り。と素直に反省したうえで、これだけの瑕疵を割り引いても翻訳の訓練に格好の本である、と多少の自負を込めて言っておこう。

今春開講 柴田耕太郎 主宰 「翻訳ジム」 受講生募集のお知らせ

1年間徹底して英文を読み解く全日制「翻訳ジム」のお知らせです。

翻訳は教えられるか、というのがかねてからの自問でした。今は教えられないという結論に達しています。なのになぜ翻訳教室を開くのか。

私が開発したいわば「英文訓読」の手法で、受講生に一点の曇りなく読み解く技術を与えたいから。正しく読めさえすれば、あとは本人の文体の問題。ひとがとやかく言うものではありません。また、翻訳を商品として見た場合、現

場を踏んだ人間でなければわからぬ決まりごとがあります。その原則を受講生に伝えたいから。翻訳の瑣末な技術など知らずとも、きちっと読めてルールを知れば、翻訳は自ずからできると確信します。

人生のなかの1年間、毎朝、じっくり英文に取り組んでみませんか。あなたの中の何かが変わるでしょう。

株式会社アイディ

柴田耕太郎 主宰 『英文教室』

詳細は <http://www.wayaku.jp>

事務担当 前川

TEL: 03-3357-1189

FAX: 03-3357-4489

Email: eibun@id-corp.co.jp

〒162-0054 新宿区河田町7-6 ID河田町ビル